

乳児の泣き声に対する父母の知覚と育児意識との関連

—家族システムの観点から—

神谷 哲司*

Mothers' and Fathers' Perception of Infant Cries and Family Relationships:
From the Viewpoint of Family System.

KAMIYA Tetsuji

キーワード：母親，父親，泣き声，子育て，家族システム

Key words: mothers, fathers, infant cries, child-rearing, family system.

【問題と目的】

乳児の泣きは、出生直後より頻繁に見られる行動であり、子どもはこの「泣き」という行動によって親への意思伝達を行なっている (Brennan & Kirkland, 1982)。親は泣きを乳児との相互作用の重要な手がかりとし (竹中, 1992)、世話やかかわりといった対処を採択する。こうした、泣き声を介した親と子どもとの間の相互交渉は、乳児の不快 (distress) な状態が親の対処によって解消されるという一連のやりとり (distress-relief-sequence) としてとらえられるものであり、このやり取りが日常生活で反復される中で、乳児は特定対象への愛着を形成すると考えられている (Lamb, 1981)。一方、親にとって、乳児の泣きは、乳児の健康やそのときの状態に関する情報を伝達するシグナルである (Green & Gustafson, 1983) とともに、強い情動の賦活因 (Murray, 1979) である。乳児の泣き声は、親の注意を喚起し、慈愛に満ちた、時にはヒステリックな行動へと駆り立てるものであり、親の介入や対処が適切であれば子育ての効力感が高まり、介入が有効でなければ親としての有能さに疑問を抱いてしまう (陳, 1986)。すなわち、乳児の泣きに対する対処は、親にとっても乳児に対する認識を形成・修正・強化するものであるとともに、そのダイアドを形成する親自身の育児に対する効力感というものを形成・修正・強化するものなのである (三宅, 1991)。

こうした泣き声を知覚し、対処する中で、乳児への認識のみならず自身の親としての認識も変化するという観点は、近年の生涯発達心理学において指摘されている「子どもに影響を与える親」だけでなく「親自身の成長・発達」に着目しようとする点と呼応する。これまでの乳児の泣きに関

*鳥取大学地域学部地域教育学科

する研究においても、泣き声の音響構造そのものが直接的に養育行動を規定するのではなく（正高，1989）、泣きをどのように受け止め、解釈するようになるかが親の対処行動にとって重要であることが示されており（田淵・島田ほか，1997；難波・松岡ほか，1997）、また、過剰に泣く乳児の母親は育児ストレスが高いこと（Wikander & Helleday, 1996）、子育てに援助を必要だと感じている母親は泣き声を力強く、高いピッチで知覚していること（Michelsson et al., 1990）、泣き声の知覚は父母ともに日常的な育児意識と関連が見られること（Wikander & Theorell, 1997）などからも、日常的な子どもの泣きを介する相互交渉を通じて、親が泣き声に対する認知的枠組みを形成していくことが伺えている。すなわち、乳児の泣きの認知については、それを親がどのようにとらえていくのかといった、親の発達という枠組みでとらえられるものでもあるといえるだろう。

上記のような観点から、神谷（2002）は、足立ほか（1985）の母親を対象とした乳児の泣き声の知覚を検討した研究を基に、乳児の泣き声に対する父親の知覚・認知について検討している。以下にこの2つの研究について概観してみよう。

足立ほか（1985）では、乳児の神経機能のリスク状態を反映するリスク得点（Prechtl, 1980）の高低によって定義された音響学的にも異なる2種の泣き声のテープ刺激を用い、乳児の泣き声を一般学生、助産学科学生、母親、経妊婦、初妊婦に呈示している。その結果、泣き声の知覚に条件差と群間の主効果と交互作用が見られ、高リスク乳児条件では群間に有意な差は得られなかったが、低リスク乳児条件において、一般学生、助産学科学生と他の3群の間に有意な値が得られている。特に医療的援助を目的とした助産科学科学生よりも初妊婦の方がリスク条件差に対し高い弁別力を示したことについて、妊娠に伴う生理・心理学的変化が関連していると推察している。

一方、同様の手続きで男子大学生、新婚期男性、初妊期男性、父親を対象とした研究（神谷，2002）では、学生群よりも父親群の方が泣き声に対するネガティブな知覚が低く、また泣き声の知覚と養育経験や育児行動との間に関連が見られ、二次的な養育者であることの多い父親においても、育児生活を通して、泣きに対処するための認知的枠組みを持っていること、それは産前より準備される可能性が示されていた。

これらより、男女とも妊娠期以降より泣き声に対する認知的枠組みを有する傾向は示されている。しかし、男性を対象とした研究では女性を対象とした研究とは異なり、泣き声の知覚について交互作用は見られておらず、泣き声の弁別について親になる過程における「生理・心理的変化」の男女差ではないかと推察されていた。また、育児期の父母を対象とした研究（神谷，1999）では、母親では泣き声のネガティブな知覚と育児ストレスに関連が見られていたものの、父親には関連が見られなかったことなどを考えると、現代の育児環境のあり方や男女の生理学的な性差をも含めて、泣き声に対する知覚の男女差を検討する意義はあるものと思われる。そこで、本研究では第一の目的として、育児期の父母を対象に乳児の泣き声に対する知覚の男女差について検討することを目的とする。

さらに冒頭に述べたように、親の発達の一側面としての乳児の泣き声の認知は、日常的な子どもとの相互交渉を通じて変化していくものであるが、家族システムの観点に基づくと、それは子どもと親という二者関係に閉じられるものではない。親の意識や育児態度は、子どもだけでなく、配偶者や他の家族成員をも含めた家族システム全体の中で力動的に変化するものであり（岡堂，1991；Belsky, 1984；Gable, Crnic, & Belsky, 1994；Sameroff, 1994）、特に近年では、子どもの精神的健康や不適応行動に及ぼす夫婦関係の影響が注目されるようになり（Fincham, 1994；Davies, & Cummings, 1998）、夫婦関係に関する実証的な研究が必要であると指摘されるようになっている。

(Fincham,1998)。

このことから、本研究では泣き声を知覚する親自身の育児意識のみならず、その配偶者(以下、パートナーとする)の育児意識にも焦点をあて、乳児の泣き声に対する親の認知と育児意識をそのパートナーの育児意識をも含めて検討することを第二の目的とする。なお、育児意識については、代表的なものとして育児ストレスを取り上げるとともに、上述のように夫婦の関係性が重視されていることから、「二人で子育てをしている」という認識(以下、子育て意識)を持っているかどうかについて尋ねることとする。

【方法】

調査対象：最終的に分析の対象となった刺激テープの評定者は、育児期の父親15名と母親29名。父親群の平均年齢は35.00歳(SD=6.93)、母親群の平均年齢は31.48歳(SD=3.90)であった。その他のフェイスシート情報はTable 1参照。なお、これらの対象者は、すべての父親が家計収入を得るために働きに出ていること、母親のうち9名がフルタイム就業、2名が育児休業中、18名が就業していないこと、父親もできる限り育児を行っているが父母の家事・育児分担は母親の方がいずれも負担率が高いことなどがフェイスシートから確認された。

Table 1 フェイスシート情報

	男性			女性		
	Mean	SD	n	Mean	SD	n
本人年齢	35.00	6.93	15	31.48	3.90	29
パートナー年齢	33.00	6.79	15	34.69	5.30	29
家族成員数	4.27	1.10	15	4.52	1.21	29
結婚暦	7.40	4.55	15	6.34	3.36	29
妊娠月数	-	-	-	7.00	1.00	3

調査場所：小児科に来院した父母を対象に調査を依頼し、協力を快諾を得られた方のみを対象に、院内の一室で行った。

手続き：Prechtl (1967) のリスク尺度を一部修正したものを用いて足立ほか(1985)が作製した刺激テープを用いた。この刺激テープは医療的処置を要しなかった生後およそ5日の満期産成熟児の痛み刺激による泣き声であり、リスク尺度得点によって泣き声を高リスク乳児、低リスク乳児の2種として定義されている。刺激テープはカセットデッキ AIWA CSD-EX310によって一定の音量(70dB)で操作され、同デッキのスピーカーより呈示された。リスク得点の異なる乳児の泣き声はランダムな順序で呈示され、調査協力者は各リスク条件の泣き声についてそれぞれ4名分、合計8名分の泣き声について項目をチェックするよう教示された。さらに、泣き声の評定後、育児意識に関する質問紙と返送用封筒が配布され、郵送によって回収された。先に述べたように、家族システムの観点から検討するため、質問紙の配布に当たっては、テープ刺激による泣き声を聞いた調査協力者に同一の質問紙を2通手渡し、自宅に持ち帰り調査協力者本人のみならず、パートナーにも記入をしてもらうように依頼した。回収数は調査協力者のうち男性10名、女性19名(回収率65.91%)。なお、男女の協力者のうち2組が夫婦双方の協力が得られたものであり、また、女性の調査協力者から回収された質問紙のうち、3通はパートナー(夫)の質問紙が未記入であった。

評定項目：泣き声の認知に関する項目は足立ほか(1985)を参考に、火急性を示す8項目に加え、

認知の様相を詳細に検討するためポジティブな感情を示す、「心地よい」「かわいい」を扱うこととし、単極法（7件法）によって評定してもらった。

質問紙項目：この質問紙は先行研究を参考に、育児意識や育児生活全般に関することについて作成されたものである。質問項目はすべて4件法。今回はこの中から、加藤・津田（1998）の育児ストレス尺度、および、「夫（妻）と二人で子どもを育てているように思う」という1項目を共育て意識として扱うこととする。育児ストレス尺度の内的整合性を確認したところ、「育児生活のストレス」 $\alpha = .64$ 、「育児肯定感」 $\alpha = .52$ 、「否定的育児行動」 $\alpha = .61$ であった。全般的に高い値とは言えないが、今回は調査対象者があまり充分でないこと、加藤・津田（1998）において整合性が確かめられていることから、そのまま用いることとした。

【結果と考察】

泣き声の知覚

まず、泣き声の認知についての項目ごとに個体間1要因（父母差）×個体内1要因（泣き声の種別）による分散分析を行った（Table 2）。その結果、すべての項目について泣き声の種別の主効果に差が見られた。それぞれ「耳ざわりな」 $F=60.46$ 、「いらだつ」 $F=37.40$ 、「気になる」 $F=66.27$ 、「いやな」 $F=46.25$ 、「心地よい」 $F=43.14$ 、「病的な」 $F=29.67$ 、「かわいい」 $F=27.41$ 、「こまる」 $F=60.60$ 、「するどい」 $F=49.02$ 、「緊急な」 $F=50.15$ 、（すべて $df=1/42, p<.001$ ）となる有意な値がえられた。また、「いやな」に性別の主効果が見られ、「いらだつ」に有意な傾向がみられていた（「いらだつ」 $F=3.14$ ($p<.10$)、「いやな」 $F=4.69$ ($p<.05$), $df=1/42$)。交互作用は「病的な」「するどい」の2項目に見られた（「病的な」 $F=4.39$ 、「するどい」 $F=4.56$ 、ともに $df=1/42$, $p<.05$ ）。

Table 2 泣き声の種別ごとの知覚項目評定値

	男性				女性				泣き声	性別	交互作用
	高リスク	SD	低リスク	SD	高リスク	SD	低リスク	SD			
耳ざわりな	3.97	0.99	2.77	0.79	4.19	0.95	3.28	0.91	60.46 ***	2.00	1.11
いらだつ	3.38	0.86	2.52	0.64	3.71	0.85	3.00	0.85	37.40 ***	3.14 †	0.39
気になる	4.87	0.97	3.70	1.20	5.03	0.75	4.10	0.96	66.27 ***	1.11	0.84
いやな	3.52	0.82	2.57	0.82	3.91	0.77	3.15	0.83	46.25 ***	4.69 *	0.58
心地よい	2.88	0.58	3.65	0.71	2.71	0.66	3.26	0.74	43.14 ***	2.17	1.15
病的な	3.47	0.88	2.40	0.75	3.43	0.90	2.96	0.82	29.67 ***	1.29	4.39 *
かわいい	3.72	0.88	4.23	0.67	3.54	0.81	4.29	0.83	27.41 ***	0.06	0.93
こまる	3.77	0.98	2.68	0.86	4.00	0.81	3.28	0.88	60.60 ***	2.74	2.53
するどい	3.97	1.27	2.30	0.83	3.67	0.73	2.78	0.88	49.00 ***	0.18	4.56 *
緊急な	3.77	1.02	2.48	0.89	3.63	0.84	2.81	0.93	50.15 ***	0.15	2.45

$df=1/42$, † $p<.10$, * $p<.05$, *** $p<.001$

これらの結果より、男女共に、泣き声の種別を弁別していることが示されており、先行研究（Zeskind & Lester, 1978；足立ほか, 1985；神谷, 2002）と同様、高リスク乳児の泣き声が泣き声を知覚する親にとって効果的なシグナルとして機能することを意味している。また、男女差は顕著ではないが、「いらだつ」や「いやな」といったネガティブな感情価を示す項目でやや女性の方が強いネガティブ感情を示していること、さらに「病的な」「するどい」といった泣き声の音響的な側面を示すと思われる項目で交互作用が見られ、女性よりも男性のほうが泣き声の弁別を明確に

している傾向が見られた。

先に、女性を対象とした研究で交互作用が見られたものの、男性では見られていなかったことは、親としての発達にかかわる男女の差ではないかと述べたが、今回、男女の比較検討においての交互作用が見られたことは泣き声知覚に性差が存在する可能性を意味しているものと考えられる。この点についてさらに検討するために、足立ほか（1985）と同様、各項目について泣き声の得点の条件差を算出し、男女間でt検定を行ったところ、先に交互作用の見られた「病的な」($t(42) = 2.10, p < .05$)、「するどい」($t(42) = 2.13, p < .05$)の2項目のみに有意な差が見られた。ここで今一度女性を対象とした結果を参照してみると、条件差に関して群間で差が見られているのは「耳ざわりな」「いらだつ」「いやな」「気になる」「病的な」の5項目であり、「するどい」には差が見られていない（足立ほか，1985）。また、「病的な」は初妊婦と2つの学生群との間に有意差が見られているのみであり、今回の調査対象と重なる母親と経産婦には差が見られていない。すなわち、男女それぞれについて交互作用の見られた項目は異なっているのである。交互作用が見られなかった男性を対象とした研究（神谷，2002）では調査項目に「いらだつ」「耳ざわりな」といったネガティブな感情価を示す4項目のみで検討していたこと、Zeskind & Lester（1978）によると高リスク乳児の泣き声は低リスク乳児に比べ複雑な様相を呈していることを考えてみると、泣き声の弁別をする際に、男女で泣き声の異なる側面に着目しているのではないかという可能性が浮かんでくる。そこで、次に知覚項目の構造を明らかにした上で、この点について検討したい。

泣き声の知覚構造

今回泣き声の知覚として用いた10項目について、男女別、泣き声の種別ごとにその構造を明らかにするため、それぞれ主成分分析を行いそのバリマックス解を求めた。その結果（Table 3, 4）、男女とも、いずれのリスク条件においても3成分が抽出されたが、「気になる」「心地よい」「かわいい」の3項目が、2つの成分で負荷量が高いかいずれの成分においても低い負荷量しか示さず単純構造をとらなかつたため、これら3項目を除き再度同じ手続きで主成分分析を行った。その結果、高リスク乳児の泣き声では男女とも、「いらだつ」「耳ざわりな」「いやな」「こまる」の4項目と、「緊急な」「病的な」「するどい」の3項目の2成分で構成され、累積説明率は男性で85.45%、女性では77.62%でまとまっていた。また、低リスク乳児の泣き声では、男女とも1つの成分にまとまり、累積寄与率は男性で82.05%、女性で72.27%であった。概ね男女とも高リスク乳児では「いらだつ」「耳ざわりな」といったネガティブな感情価を示す項目と、「するどい」「緊急な」といった音響的な側面を示す成分に分けられ、低リスクでは一つの成分にまとまっていることが示され、Zeskind & Lester（1978）と同様の結果が示されている。

Table 3 泣き声条件ごとの最終主成分分解 (男性)

	高リスク乳児				低リスク乳児		
	F1	F2	h ²	α	F1	h ²	α
緊急な	0.93	0.24	0.92		0.90	0.81	
病的な	0.90	0.30	0.90		0.88	0.78	
するどい	0.90	0.29	0.88	0.94	0.92	0.85	
いらだつ	0.25	0.94	0.94		0.92	0.85	
耳ざわりな	0.15	0.92	0.87		0.86	0.73	0.96
いやな	0.44	0.71	0.71		0.93	0.86	
こまる	0.52	0.69	0.75	0.91	0.93	0.87	
平方和	3.04	2.94			5.74		
寄与率	43.39	42.06			82.05		
累積寄与率	43.39	85.45					

Table 4 泣き声条件ごとの最終主成分分解 (女性)

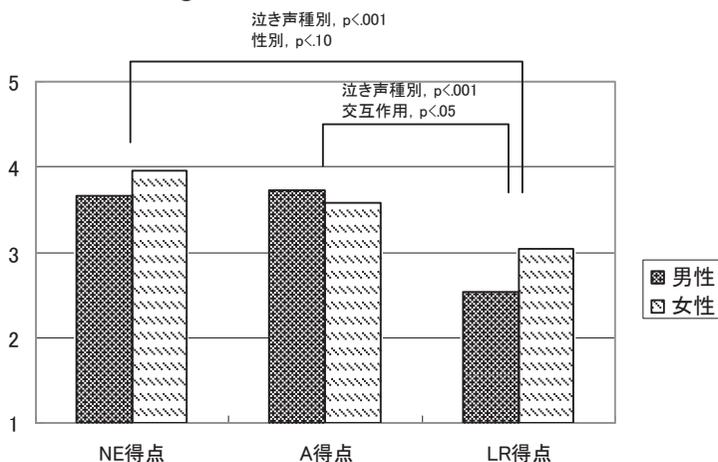
	高リスク乳児				低リスク乳児		
	F1	F2	h ²	α	F1	h ²	α
いらだつ	0.96	0.15	0.94		0.87	0.76	
耳ざわりな	0.88	0.23	0.82		0.87	0.75	
いやな	0.84	0.39	0.86		0.87	0.75	
こまる	0.82	0.39	0.83	0.94	0.85	0.73	0.94
するどい	0.24	0.85	0.78		0.82	0.67	
緊急な	0.29	0.76	0.66		0.82	0.67	
病的な	0.18	0.72	0.55	0.73	0.86	0.73	
平方和	3.24	2.20			5.06		
寄与率	46.24	31.38			72.27		
累積寄与率	46.24	77.62					

以上より、高リスク乳児の泣き声において、第1成分を構成したネガティブな感情価を示すと思われる4項目を加算平均したものをネガティブ感情価得点（以下、NE得点）、第2成分を構成した音響的側面を示す3項目を加算平均したものを音響的特性得点（以下、A得点）、低リスク乳児の泣き声としてまとめられた7項目を低リスク得点（以下、LR得点）とし、以後の分析に用いることとする。それぞれの内的整合性は、NE得点で男性 $\alpha = .91$ 、女性 $\alpha = .94$ 、A得点男性 $\alpha = .94$ 、女性 $\alpha = .73$ 、LR得点男性 $\alpha = .96$ 、女性 $\alpha = .94$ であった。

これらの各成分得点を元に、先に検討した泣き声の知覚の男女差について再度検討してみた。具体的には、高リスク乳児の泣き声において得られた2つの側面、NE得点、A得点と低リスク乳児の泣き声であるLR得点との比較であり、性別×尺度の個体間1要因、個体内1要因の分散分析である。その結果（Figure 1）、NE得点とLR得点との比較では、泣き声の種別の主効果に有意な差が見られ（ $F(1,42) = 70.73$ ($p < .001$)), 性別の主効果に有意な傾向が見られた（ $F(1,42) = 3.61$ ($p < .10$)), また交互作用は見られなかった（ $F(1,42) = .78$ (n.s.))。A得点とLR得点では、泣き声の種別の主効果が見られたほか（ $F(1,42) = 45.65$ ($p < .001$)) 交互作用が有意であり（ $F(1,42) = 6.58$ ($p < .05$)), 性別の主効果は見られなかった（ $F(1,42) = .72$ (n.s.))。

足立ほか（1985）において、（女子）学生群よりも母親群において弁別力が高いことが示されていたのはネガティブな感情価を示す項目であったが、男性を対象とした結果では、ネガティブな感情価については、父親と学生群との比較では交互作用は見られていなかった（神谷，2002）。今回検討した父母比較では、「するどい」のような音響的特性を示す項目において、父親の方が母親よりも高い弁別力を示す結果であった。このことは、可能性のひとつとして、男性においては学生と父親を比較した場合に音響的側面においては交互作用がみられることを予想させ、男女の親発達の

Figure 1 泣き声の知覚の各成分得点



過程で乳児の泣き声の知覚で弁別する側面が異なることを示唆するものかもしれない。このことは、あくまでも推測でしかなく、また、その性差も生物学的なものか、養育者としてのかかわりの程度によるものかを判別することはできないが、今後検討する意義のある可能性ではないかと思われる。

泣き声の知覚と育児意識

育児意識として取り上げる変数の基礎集計と、それぞれの育児意識と泣き声に対する知覚得点との単純相関を Table 5 に示す。

Table 5 泣き声の知覚得点と育児意識の関連

	男性					女性				
	Mean	SD	NE得点	A得点	LR得点	Mean	SD	NE得点	A得点	LR得点
自己										
育児生活のストレス	1.41	0.23	-0.12	0.18	0.06	2.23	0.54	0.46 *	-0.08	0.19
育児肯定感	3.39	0.35	0.01	0.23	0.59	3.44	0.44	-0.41 †	0.06	-0.33
否定的育児行動	1.62	0.55	-0.27	-0.22	-0.74 *	2.19	0.83	0.42 †	0.11	-0.04
子育て意識	3.25	0.71	-0.16	0.00	-0.40	2.90	1.29	-0.10	0.04	0.33
パートナー										
育児生活のストレス	2.12	0.54	-0.17	-0.51	0.04	1.67	0.43	0.54 *	0.13	0.30
育児肯定感	3.63	0.29	0.30	0.15	0.36	3.35	0.41	-0.17	0.15	0.25
否定的育児行動	2.07	0.75	0.57 †	0.17	-0.24	1.80	0.58	0.32	0.19	0.23
子育て意識	3.70	0.95	0.67 *	0.39	0.21	3.22	0.88	-0.52 *	-0.13	-0.25

n=7-10

n=17-20

† p<.10, * p<.05

まず、泣き声調査への協力者の自己評定について見ると、男性協力者において、LR 得点と「否定的育児行動」との間に負の相関が見られていた。また、女性協力者については、NE 得点と育児ストレスの下位尺度に統計的に有意、もしくはは有意な傾向で中程度の相関が見られていた。さらに、調査協力者の泣き声の知覚と、そのパートナーの育児意識との関連を見てみると、男性協力者のパートナーでは、NE 得点と「否定的育児行動」「子育て意識」がともに正の相関を示し、女性協力者のパートナーでは、NE 得点と育児生活のストレスとの間に中程度の有意な正の相関が、子育て意識との間に有意な中程度の負の相関が見られた。

これらの結果において着目すべき点は以下の2つであろう。まず、女性においてNE得点と自己の育児ストレスの下位尺度との間に中程度の相関が見られていたが、男性ではNE得点との間に有意な相関は見られていないこと、さらに、男女ともにNE得点とそのパートナーの育児意識における育児ストレスや子育て意識に関連が見られていたことである。

まず、育児ストレス尺度と自己評定との関連については、神谷(1999)と同様、女性にNE得点との間に正の相関が見られていた。このことは泣き声に対していらだったり、いやな思いをする場合、日常的な育児生活においてストレスが高く、育児肯定感が低く、また否定的な育児行動をとりやすいことを示している。また、この結果において特記すべきは、育児ストレスとの関連がNE得点でのみ見られたことである。NE得点は高リスク乳児の泣き声に対する知覚のうちネガティブな感情価を示す側面であったが、同様の項目を含む低リスク乳児の泣き声で関連が見られていないことは、リスク得点が示す子どもの気質的な違いが泣き声の知覚に影響を及ぼしていると考えられる。

さらに、NE得点は調査協力者の自己評定のみならず、そのパートナーの評定した育児ストレスや子育て意識とも関連していることが示された。このことは乳児の泣きの知覚という側面についても、日常的な育児意識と同様、家族成員間の相互交渉と関連していることを示し、まさに泣き声の知覚そのものも家族システムのダイナミズムの中で変化する可能性が示されているものと思われる。特に、女性評定者のパートナーにおいて「育児生活のストレス」に正の関連が見られ、「子育て意識」に負の関連が見られたことは、高リスク乳児の泣き声に対してネガティブに知覚する女性は自身が育児ストレスを高く認識するのみならず、パートナーも育児生活のストレスを感じ、また子育て意識を持っていないことを示している。これはまさに、父親が妻と共に子育てをしているという認識を持たない場合、つまり、父親からのサポートが十分に得られていない家庭において、母親が高リスク乳児のような気質的に難しい子どもにかかわるときに母親の育児ストレスも高まることを意味しているであろうと考えられる。

また、男性評定者のパートナーでは「否定的育児行動」「子育て意識」と男性のNE得点とに正の関連が見られていた。前者は、高リスク乳児の泣き声をネガティブに知覚する父親のパートナーはより否定的行動をとる傾向が示されており、ここでもパートナーとの関係性が男性の泣き声の知覚に関連していることが示されている。一方、男性評定者のパートナーの「子育て意識」については、父親がネガティブな知覚をしている場合、そのパートナーの子育て意識は高いことが示されており、解釈が難しいところがある。しかし、記述統計に目を転じると、男性のパートナーの「子育て意識」は平均値が3.70、標準偏差が.95であり、天井効果が見られていた。さらに、ローデータを確認したところ、今回扱った男性評定者のパートナー10名のデータのうち、9名が評定値4をつけ、1名のみ1をつけていたことが確認され、外れ値の影響によるものであると考えられる。

【全体的考察】

本研究では親の発達という観点から、育児期の父母を対象に泣き声の知覚の男女差とその育児意識との関連について、家族システムの観点を含みながら検討した。得られた主たる結果は、(1)乳児の泣き声に対する知覚について、父母それぞれ泣き声の異なる側面に対して弁別をしている可能性があること、(2)泣き声の知覚は知覚する本人の育児意識のみならず、そのパートナーの育児意識とも関連すること、(3)さらにそれらの関連は、主に、高リスク乳児の泣き声に対するネガティブな側

面の知覚において示されていたことである。

1点目の父母差を示す知見について、ジェンダー・センシティブな観点からは安易な結論は避けねばならないが、今後検討すべき課題として意義のあるものと考えられる。女性を対象とした研究では、高リスク乳児の泣き声に対して、母親はより乳児に接し、養育しようとする方向に、低リスク乳児の泣き声に対しては、母親は距離をおき、妊婦、助産学科学生は接しようとする方向にあったこと（足立ほか、1984）、2種のリスク得点を示す泣き声に対する弁別力は、母親においてネガティブな側面で示されていたことを踏まえると、女性においてはネガティブな側面での知覚が乳児への対処行動につながる認知処理がなされていることが想定されるだろう。このことを踏まえて、本研究で示された音響的側面での男性の弁別力の高さについて明らかにすることが望まれる。ただ、今回の結果で性差が見られたことは、父親においては育児行動の頻度が高いほど泣き声をネガティブに知覚しないこと（神谷、2002）とあわせて、日常的な子育ての中で、父母それぞれに泣き声に対する認知的枠組みが形成されていることを示すものと思われる。

そのことは、2点目の結果として示された、泣き声の知覚はパートナーの育児意識とも関連することからも示されているといえるだろう。特に女性では、泣き声のネガティブな知覚得点が高いほど、自身の育児ストレスも高いだけでなく、そのパートナーの育児ストレスも高く、共育て意識が低いことが示されている。これまでも、子どもの発達と父母双方の育児意識や感情が関連していることが示されているが（菅原ほか、1999；加藤・石井・牧野・土谷、2002）、そうした関連が乳児の泣き声の知覚においても確かめられたことは、まさに親の育児意識を日常的な父・母・子という家族システムの文脈でとらえねばならないことを示しているものと考えられる。

さらに、本研究では、泣き声とその知覚者のパートナーの育児意識とに関連が見られたのは、高リスク乳児の泣き声に対するネガティブな知覚だけであった。このリスク得点という指標は、Prechtl (1968)によると、分娩時のリスクのみならず乳児の神経系統に対するリスクを示すものであり、また知覚者にとってより不快で病的なものとして知覚されるものである（Zeskind & Lester, 1978）。このことを踏まえると、高リスク乳児の、それもネガティブな知覚の側面においてのみ上記のような関連が見られたことは、父母の育児意識に対して乳児の気質という、子ども側の要因、すなわち「泣き」という場面において、子どもがどのような表出を行うか、換言すれば子ども自身がどのような「子ども役割」を担うかによっても、父母の育児意識に違いが生じることを示すものであろう。子どもの気質的な難しさが母親の育児不安に影響を与えることは今までも指摘されているが（水野、1998；加藤・津田、2001）、本研究の結果は、それらの親に対して、泣きへの対処について焦点化した援助の意義を示唆するものであるとも考えられるであろう。

最後に、今後の課題について触れておく。まず、対象となった調査協力者の数が少なく、結果が不安定なことが挙げられるであろう。特に、育児意識の平均値に偏りが大きく、中でも「共育て意識」において天井効果がみられていた。このことは、調査協力者を増やすのみならず、共育て意識の測定について1項目だけではなく、神谷（2004）で用いられた6項目からなる共育て尺度を用いた方がよいものと考えられる。また、今回、父母比較を行うにあたり、育児期家族（就学前児童を持つ家族）の父母に協力を依頼したが、親発達という観点からすれば、第一子誕生後の育児経験年数を考慮する必要があるであろう。

【付記】

本研究にご協力いただきましたご家族の皆様と小児科スタッフ、および宮城学院女子大学足立智昭先生、

東北大学大学院教育学研究科菊池武剋先生に深謝の意を申し上げます。

なお、本稿は神谷(1999)にデータを加え、異なる観点から分析を行った神谷(2005)の第9章を更に大幅に改稿、修正したものである。

【文献】

- 足立智昭・村井憲男・岡田斉・仁平義明 1985 母親の乳児の泣き声の知覚に関する研究. 教育心理学研究, 33, 146-151.
- 足立智昭・仁平義明・村井憲男 1984 乳児の泣き声に対する母親の対処行動に関する研究 母性衛生 25 (2), 235-239.
- Belsky, J. 1984 The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Brennan, M. & Kirkland, J. 1982 Classification of infant cries using descriptive scales. *Infant Behavior and Development*, Vol.5, 341-346.
- 陳省仁. 1986 新生児・乳児の「泣き」について—初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味—北海道大学教育学部紀要, 48, 187-206.
- Davies, P. T., & Cummings, E. M. 1998 Exploring children's emotional security as a mediator of the link between marital relations and child adjustment. *Child Development*, 69, 124-139.
- Fincham, F. D. 1994 Understanding the association between marital relations and parent-child interaction: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 118, 108-132.
- Fincham, F. D. 1998 Child development and marital relations. *Child Development*, 69, 543-574.
- Gable, S., Crnic, K., & Belsky, J. 1994 Coparenting within the family system. *Family Relations*, 43, 380-386.
- Green, J. A., & Gustafson, G. E. 1983 Individual recognition of human infants on the basis of cries alone. *Developmental Psychology*, 16, 485-493.
- 神谷哲司 1999 乳児の泣き声に対する親の認知と対処行動. 家族心理学研究, 13 (2), 103-114.
- 神谷哲司 2002 乳児の泣き声に対する父親の認知. 発達心理学研究, 13 (3), 284-294.
- 神谷哲司 2004 育児期夫婦における親役割観の異同と子育て意識の関連. いわき短期大学研究紀要, 37, 1-24.
- 神谷哲司 2005 親役割観の形成と変化に関する研究—育児期家族を中心に—. 東北大学大学院教育学研究科博士論文(未公刊).
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から. 発達心理学研究, 13 (1), 30-41.
- 加藤道代・津田千鶴 1998 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討. 小児保健研究, 57 (3), 433-440.
- 加藤道代・津田千鶴 2001 育児初期の母親における養育意識・行動の縦断的变化. 小児保健研究, 60 (6), 780-786.
- Lamb, M. E. 1981 Developing trust and perceived effectance in infancy. L. P. Lipsitt. (Ed.), *Advances in Infancy Research: vol.1. Ablex*.
- 正高信男. 1989 乳児の泣き声研究の展望. 心理学評論, 32 (4), 407-420.
- Michelsson, K., & Paajanen, S., & Rinne, A., & Tervo, H. 1990 Mothers' perceptions of and feelings towards their babies' crying. *Early Child Development & Care*, 65, 109-116.
- 三宅和夫 1991 乳幼児の人格形成と母子関係 東京大学出版会
- 水野里恵 1998 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連: 第一子を対象とし

- た乳幼児期の縦断研究．発達心理学研究,9 (1) ,56-65
- Murry,A.D. 1979 Infant crying as an elicitor of parental behavior: An examination of two models. *Psychological Bulletin*, 86, 191-215.
- 難波寿子・松岡恵・川越厚．1997 母親が新生児が泣く理由を判断する要因の経日的変化．*母性衛生* , 38 (4) , 382-388.
- 岡堂哲雄 1991 家族心理学講義 金子書房
- PrechtI,H.F.R. 1967 Neurological sequelae of prenatal and perinatal complications. *British Medical Journal*, 4, 763-767.
- PrechtI,H.F.R. 1968 Neurological findings in newborn infants after pre- and perinatal complications. In J.Jonix, H.Visser, & J.Troelstra (Eds.). *Aspects of prematurity and dysmaturity: a Nutrica symposium*. Stenfert-Kroese.
- PrechtI,H.F.R. 1980 The optimality concept. *Early Human Development*, 4, 201-205.
- Sameroff,A.J. 1994 Developmental systems and family functioning. In R.D.Parke & S.G.Lellam (Eds.). *Exploring family relationships with other social contexts*. Erlbaum.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から．*発達心理学研究* ,10 (1) ,32-45.
- 田淵紀子・島田啓子・阪井明美・小松みどり 1997 新生児の泣き声に対する母親の受けとめ方．*日本助産学会誌* , 10 (2) , 81-84.
- 竹中和子 1992 乳児の泣きと乳児 - 保育者相互作用 —自然場面における保育者の心拍数の変化— *日本赤十字看護大学紀要* . 6, 75-82.
- Wikander,B.,& Helleday, A. 1996 The excessively crying infant: The mother-infant relationship. *Early Child Development & Care*, 124, 11-23.
- Wikander,B.,& Theorell,T. 1997 Fathers' experience of childbirth and its relation to crying in his infant. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 11 (3) , 151-158.
- Zeskind,P.S. & Lester,B.M. 1978 Acoustic features and auditory perception of the cries of newborns with prenatal and perinatal complications. *Child Development*, 49, 580-589.

Mothers' and Fathers' Perception of Infant Cries and Family Relationships:
From the Viewpoint of Family System.

KAMIYA Tetsuji

This paper aims to investigate differences in fathers' and mothers' perceptions of infant cries in child-rearing, and the correlation of their perception and family relationships from the viewpoint of the family system. Fifteen fathers and twenty-nine mothers with preschool children rated the cries of infants who had been evaluated as low and high for risk/complications, and completed a questionnaire about their family relationships.

The results were as follows: (1) Both mothers and fathers were able to discriminate two kinds of cries, (2) Fathers especially discriminated two kinds of cries more definitely than mothers on features, such as the items of "piercing" or "sick". As for the correlation between perception of cries of high-complication infants and their family relationships of participants or their partners, (3) Negative perception of mothers was correlated with their own daily stress of child-rearing, (4) Negative perception of both mothers and fathers was correlated with their partner's daily stress of child rearing or the consciousness of their marital relationship. These results demonstrated that both mothers' and fathers' perceptions of infant cries might be relevant to their family relationships through the transaction process in the family system.

(2007年1月15日受付, 2007年1月17日受理)